

利上げの季節と通貨対策

利上げの季節の到来だ。日銀もようやく今月の会合で 0.25%利上げを決めそうだ。高市政権からの利上げけん制圧力と、米財務長官ベッセントからの「Behind the curve」警告を受け、日銀総裁も相当ストレスが溜まったことだろう。市場では年内更なる利上げの見方が多い。円安対策としても継続利上げが条件になる。

日銀だけに留まらない。ECB も今週の理事会で 0.25%の利上げを決めそうだ。3 年ぶりの利上げだ。5 月のインフレ率は 3.2%と中期目標の 2%を大きく上回っている。市場では年内あと 1, 2 度の利上げを見込む。

利上げは先進国だけに留まらない。インドネシアでは昨日政策金利を 0.25%上げた。3 週間前に 0.5%の利上げをしたばかりだ。通貨ルピアの下落を抑制するためだ。だが 0.5%の利上げでもルピア下落は止まらず、それで短期間での再利上げになった。今回はさすがにルピアの買戻しが入った。ただこれでトレンドが変わったと見るのは妥当ではない。

それで米国になるが、先週の雇用統計は年内利下げの可能性を小さくした。むしろ利上げの可能性を高めた。5 月の NFP(非農業部門雇用者数)は予想の倍以上だった。その上 3 月、4 月の数字を上方修正した。これを受け米国の金利(特に短い方)とドルが上昇した。

雇用と並んで重要な指標であるインフレ指標は今日発表される。5 月に CPI は 4.3%の上昇予想だ。前月は 3.8%だった。エネルギーと食料を除くコアは 2.9%の予想で前月 (2.8%) とあまり変わらない。この予想が正しければエネルギーコストがまだ広範な物価に波及していないことになる。この点からは利上げの緊急性は低下する。

この二つの指標からは、利上げ基調だが利上げをどんどん進める状況にはないとの判断が妥当だろう。

直近の金融先物市場の価格から判断する政策金利(フェドファンド金利)の見通しによると、年内は 12 月に 0.25%の利上げが一度になっている。

利下げ志向のトランプ大統領の指名でFEDの新議長に就任するウオーシュも11月の中間選挙前に利上げをすることは避けたいだろう。とは言ってもFOMCで多数の賛意を得られなければ自らの判断を実施に移せない。利上げは米国経済を破壊すると怒り心頭のトランプの顔を思い浮かべるのはウオーシュにとって辛い試練になる。